

アートアニメーションの道程

監修者 **おかだ えみこ**（アニメーション研究者）

「大藤信郎賞受賞 短編アニメーション全集」を作り上げたのは2000年の初頭だった。鑑賞の機会が少ない非商業アニメの貴重な挑戦、独自の魅力を持つ作品群を収めることができたが、それらは《毎日映画コンクール》にこの賞が設けられた1962年以降の作品に限られた。

日本のアニメ史は大正6年（1917）に始まる。それ以来無数の短編アニメが作られたが、その大半は失われてしまった。関東大震災や太平洋戦争の戦災被害によるばかりでなく、保存の意識も設備もなかったからである。アニメ史自体がおぼろげなまま、多くの作品が消えた。

今回中心になるのは苛酷な時の流れの中で辛うじて生き残った貴重なアニメーションたちである。もちろんこれがすべてではなく、いろいろな事情で収められなかった作品もあるが、提供して下さった各位のご理解ご好意、スタッフの情熱と努力でこれまで全くソフト化されなかった多くのアニメを集めることができた。

前回、他の作品も、という声が多かった大藤信郎、商業アニメの基礎を築いた政岡憲三とそのグループ、日本最初の長編を生んだ瀬尾光世、日本と中国で人形アニメの創始者となった持永只仁たちをはじめとして、1920年代から1970年代までの日本アニメ史選集。エンタテインメントから実験・前衛を経てくアートアニメーション）と呼ばれるまでの日本のアニメの歩んだ道は、きっと興味深く見ていただけることだろう。

アニメーション発達史を一望する文化遺産

片山雅博（アニメーション作家 多摩美術大学助教授 日本アニメーション協会事務局長）

「日本アートアニメーション映画選集」はまぎれもない貴重な文化遺産である。今までほとんど知られることがなかった日本アニメーションの成り立ちを、数多くの優れた作品から解析することが可能になったのだ！私はこれら多くの幻の作品が、DVDでまともに見ることが出来る時代が来るには夢にも思わなかった。これは夢ではなく現実である。紀伊國屋書店と映像文化製作者連盟が、この前人未到にして壮大な企みを実現に導いたのである。加えて我が国アニメーション研究の第一人者おかだえみこさんの監修のもと、アニメーションを愛する多くの機関や個人の方々のご協力またご尽力によって、この一大事業が可能になったのである。私自身参画出来た事は望外の幸せであった。長い歴史をきざんで奇跡に残ったフィルムに、IMAGICAが心を込めて新たな命を吹き込んだ。ハイテク技術で、甦ったいにしえのアニメーション！日本独特の繊細にして精緻な切り紙・影絵技法のなんと華麗で美しいことだろう！今後は80年代90年代の傑作群を発刊する予定だそうだ。先に刊行された「大藤信郎賞受賞短編アニメーション全集」と合わせると、さながら我が国のアニメーションの発達史を一望するまたとない機会である。今後二度と出来ない企画だ。もう少し長生きしてみることにしよう！

生き延びた理由―アニメーション・フィルムの場合

常史史子（東京国立近代美術館フィルムセンター研究員）

東京国立近代美術館フィルムセンターが保存する日本アニメーション映画は727本（平成14年3月末現在）。戦前に文部省社会教育局が製作した「文部省映画」（「心の力」など）、敗戦直後に占領軍によって接収され、アメリカ議会図書館で保存されていた可燃性プリントを不燃化した「返還映画」（『お猿の三吉 突撃隊』など）が二つの柱だが、故大藤信郎氏をはじめとする作家ご本人や、コレクターの方から寄贈されたものも少なくない。2003年度より、デジタル媒体によるコレクションの活用がフィルムセンターの事業の一つに加えられたこともあり、今回のDVDリリースには25作品の原版を提供した。

「文部省映画」や「返還映画」はおおむね35mm原版で保存されているものの、今回提供した素材の中にはさまざまな経緯で収集された16mmプリントも多く含まれている。アニメーション映画は商業映画館での35mm上映以外に、学校や公共施設で16mm上映される機会が多かったため、通常の劇映画以上に16mmが広く流布していた。アニメーションを集中的に収集する愛好家も多い。

そうした事実が尾を引いて、古い作品の存否についてはいまだ不透明な部分かなり残されている。今回のDVDで幸いにも光を得た作品たち―それは日本アニメーションの豊かな歴史を雄弁に物語るが、それでもやはりごく一部である―が、他の作品をも光のもとへ連れ出す一助となってくれればと思う。

アニメーション・フィルム収集余話

安井喜雄（フラネット映画資料図書館）

昔からアニメーションは子供向きに作られたものが多い。だから、学校や家庭で上映するために多くのコピーが作られ販売された。このことが幸いして、劇映画に比べると今日でも見ることが出来る作品が多いのは嬉しい。私が集め出した頃は、古いフィルムが収集家の間で比較的安価で流通していたので、作品を選ばず何でも購入した。しかし最近では、昔からの収集家がほとんど亡くなり入手経路が絶たれてしまったため、フィルム収集が困難となった。中でもアニメの収集家として最も有名だったのが杉本五郎で、その膨大なコレクションから幾多の作品を借り上映会を開いたこともある。しかし、杉本氏のようにアニメに関心がある収集家はごく僅かで、私が知る収集家の大半は古い時代劇専門である。彼らはアニメに興味がなく、入手すれば譲ってくれる大変ありがたい存在だった。埼玉の大橋正英、京都の田淵宇一郎など、フィルム収集に命を賭けた人々が貴重なアニメ・フィルムを救ってくれた。ここに改めて感謝したい。しかし、問題は多く残っている。なぜオ리지ナルのネガや35mmのプリントが跡形もなく消えてしまったのだろうか。弱小プロダクションならまだしも、大手の映画会社でさえ破壊してしまった作品があまりにも多すぎる。政岡憲三や瀬尾光世の作品でさえ全作残っていないのだ。日本の映画文化の底の浅さを改めて思い知らされた。あなたの自宅に眠っているフィルムの中に幻のアニメはありませんか？

日本アートアニメーション映画選集

作品の決定とDVD収録について

■**作品の選定基準**

1. 方針

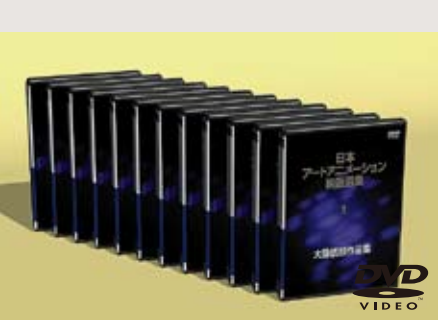
(1) 本選集の目的は、日本のアニメーションの歴史を具体的にたどれるものにするることである。
(2) 各時代、各潮流の代表的なものを収録すること（縦軸）。
(3) 娯楽、教育、PRアニメなど、幅広い分野、様々な表現技法を対象とすること（横軸）。
(4) 今日の観客の目から見ても充分鑑賞に耐える作品であること。

2. 作品の決定について

企画段階から3年以上の時間をかけて作品を選定した上、監修者・スタッフで実際に試写を行ない、収録作品を決定致しました。

3. 作品の提供について

東京国立近代美術館フィルムセンター、フラネット映画資料図書館、各映画会社、DVDメーカー、大学などの団体、作家やコレクターなど個人の方々に、作品提供のご協力を頂きました。



■**映像・音楽について**

1. 最良の原版を使用

フィルムに関しては、複数存在するものは比較検討を実施し、最良の版を選択。又、異なる原版で、夫々異なる意義をもつものについては、一方を特典として収録致しました。

2. 画面・音声の修復について

古い作品は原版に汚破損がありますが、映像・楽曲については、可能な限り補修・再録音を実施。今日の技術による修復を行いました。

3. ニュープリントについて

ネガフィルムが現存する作品については、ニュープリントを作成。持永只仁作品、東映作品など、収録作品を決定致しました。

4. 全画面の再現のために

映画フィルムは、家庭用のモニターで再生すると、機種により映像の端が見えにくくなります。今回は作品の隅々までご覧いただけるように、収録画面に92%の縮小を施しております。

DVD 日本アートアニメーション映画選集 全12巻（収録時間合計1,334分）
¥360,000（税込価格**¥378,000**）※分売は致しません
KKAL-15 ISBN: 4-87766-596-X 2004年 日本

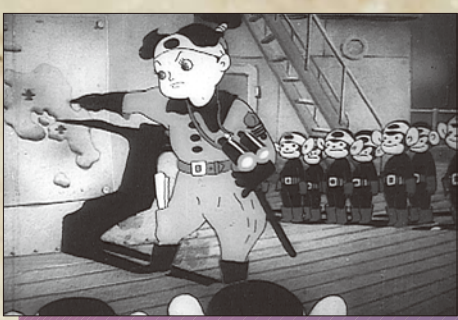
■**著作権**
このディスクの映像・音声ならびにパッケージに関する全ての権利は著作権者が有しており、無断複製、改変、公衆送信（放送、有線放送、インターネットなど）をすることは法律で禁止されております。
■**本ディスクは**、家庭内視聴と、団体向と表示されたディスクをお求めの場合については、学校、公共施設での個人を対象とした視聴・貸出に用途を限って頒布されているものであり、又、団体向と表示されたディスクの購入者に限り学校・公共施設内での少人数を対象とした無償上映に関して、許可されております。

アニメーションの国、ニッポンの履歴書

漫画・アニメーション映画とその歴史を、実際の作品で総括する、空前絶後のコレクション

日本アートアニメーション映画選集

全**12**巻



日本アートアニメーション映画選集



持永只仁



数下泰司



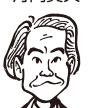
森やすじ



藤谷虹児



月岡貞夫



白川大作



矢吹公郎



絵：片山雅博

推薦のこぼば

はじめ

太初にアニメーションありき
山田 宏一（映画評論家）
アートアニメーションの「アート」は、「芸術」というより、むしろ面白く見せるためのあの手、この手の「技術」を意味しているかのようだ。長篇のストーリーアニメーションに対して、短篇ならではの手法、その意味でのアート＝技術の粋を集めた日本アニメーション史といったところ。モノクロからカラーへ、横俣から独創へ、稚拙から精緻巧妙へ、試行錯誤から洗練へという軌跡をたどることもできれば、児童向けの日本むかしばなし、学校教材用の教育映画、国威発揚から企業宣伝に至るPR映画、テレビ用、劇場用、実験的個人映画に至るまで、多種多形、何でもありというたのしさだ。

漫画家の横山隆一作（そしてもちろん、作画も）、作家の大岡昇平作曲（そしてたぶん、ピアノ演奏も）というモノクロ、各篇3分30秒の「5万匹」シリーズのような珍品（少なくとも私は初めて見る作品だ）にも出合える。なかでも、アクリイのナンセンスきまるる語源を描く「口鍵」の単純ながら抱腹絶倒のギャグなどには至福の時を堪能する。

思えば、太初にアニメーションありき―映画以前にすでにアニメーションがあったのだ。そして、映画が発明されたあとも、アニメーションは、映画史に含流しきれずに、バラレルに独自の流れを形づくってきたかにみえる。

かつてアニメーションはアヴァンギャルドと同義語だった。時代の先端をゆく「前衛」だったのだ。その意味での「アートアニメーション」であることもたしかだ。

